

時代を読み、未来を拓く

伊丹 儀友*

自分が透析医療の世界に入った 1982 年頃、透析に関する図書は太田和夫先生の『人工腎臓の実際』くらいしかなく、雑誌も『Nephron』『Kidney International』『Clinical Nephrology』程度であった。各誌に数編ずつ掲載される慢性腎不全や透析に関する論文を探しては、読むしかなかった時代である。それらの多くは各発表者の意見や観察結果であり、それが将来に残る貴重な論文なのかどうか、浅学菲才の自分には判別がつかなかった。

その後、待っていたかのように創刊されたのが『臨牀透析』であった。当時、自分がアルバイトに赴いた透析施設には、必ずといっていいほどこの雑誌が置いてあった。ページをめくると、日進月歩の医療技術や知識がわかりやすく整理されて載っており、自分の知識の確認や新しい発見に大いに役立った。そして、その分野の最先端を走るエキスパートに知見をまとめてもらうことの重要性を、この雑誌から教わったものである。

近年、英文雑誌は急増し、透析関連の論文や書籍は毎月数多く出版されるようになった。次々と発表される新たな知見に、目まぐるしさを覚える毎日である。そのような混沌とした時代だからこそ、その道の専門家による『臨牀透析』の総説は、自分の「知識の道しるべ」となってくれた。

また、『臨牀透析』は栄養に関する特集も非常に充実していた。診療報酬上、透析患者への食事提供（入院・通院時の給食対応）が評価されなくなった時代にあっても、『臨

* 伊丹腎クリニック

『臨牀透析』は一貫して栄養の重要性を認め、さまざまな企画を打ち出していた。現在、透析患者のフレイルが注目され、「いかに患者によく食べてもらうか」が大きなテーマとなっているが、『臨牀透析』はまさにその最先端を走っていたといえる。

さらに、高齢の透析患者が増加するなかで、保存的腎臓療法や介護を要する患者・付き添う家族の支援、そして「Shared Decision Making（共同意思決定）」や「Patient-Centered Care（患者中心の医療）」の重要性がいま叫ばれている。『臨牀透析』はこうした課題にもいち早く取り組み、看護の視点を取り入れ、近年では多職種連携を意識した企画を次々と世に送り出してきた。このように、日本の透析医療の全般を支え、常に時代を先取りしてきた雑誌の新刊が読めなくなるのは、非常に残念でならない。休刊（お休み）であるなら、必要なタイミングで適宜刊行したい。これまで『臨牀透析』が紡いだ歴史を引き継ぐ羅針盤は必要だと考える。